

「農業農村開発の技術」は、言葉の通り解釈すれば、農業および農村を開発するための手段と定義できる。より具体的には、農業農村開発の技術とは、農業を営む人々、あるいは農村に住む人々の生活に役立つような手段である。技術者が対象とする農村生活者の役に立つ手段を提供するためには、彼らの本音を把握する必要がある。しかし、実際のところ、人々は本音と建前を使い分けるので、単なるアンケート調査のようなものでは本音を引き出すのは難しい。また、一概に農村と言っても、農村に住む人々の生活パターンは、各地域の風土や歴史などに根差しており、異なる地域社会に生活する人々の本音をいかに捉えるかが重要だ。農業農村で生活する人々の本音を正しく把握するためには、文化まで踏み込んで理解する必要がある。なぜなら、技術は文明としては農業農村社会に導入できても、文化レベルでは導入できないからだ。

発展途上国における農業農村開発を考えると、日本の技術者は日本における農業の歴史を踏まえたうえで、技術の導入と普及を図る必要がある。農業技術は、農作業の力仕事を軽減し、農作業に拘束される時間を解放することで、生活にゆとりをもたらす。しかし、急速な技術の導入は環境の破壊をもたらし、社会の混乱を招くことになりかねない。実際日本では、戦後の高度成長期における急激な工業化が公害問題を招き、急激な農業機械化と化学肥料が、コメの生産調整・減反政策に繋がった。耕作放棄など新たな問題に直面している日本の経験を踏まえた上で、対象国の既存技術など地域の現状を正しく分析し、新たな技術を導入することで何が起こり得るのか、技術者は現場の本音に耳を傾け、用意周到に技術の導入方法を準備する必要がある。農業農村の持続可能性を考えた場合、ときにはローテクとハイテクを組み合わせながら、じわじわと技術を浸透普及することも必要である。

導入した技術が根付くかどうかや新たな技術の普及は、対象とする地元の農業農村の社会的ニーズ次第である。農業農村開発の技術者は、対象とする「農業農村社会の本音」と「適用可能な技術」との両方を知っている必要がある。また、細分化されてしまった農学全分野の最低限の技術に通じていなければならない。